

第30回庭野平和賞受賞記念講演

「新しい、寛容の時代の夜明けを迎えよう」

グナール・スタルセット
ノルウェー国教会オスロ名誉監督

ご列席の皆さま。

荣誉ある庭野平和賞に値する人物として選ばれたことを、私はたいへん光栄に存じます。これまでに世界中から受賞された方々の仲間として、30人目の受賞者に選んで頂いたことに深い感動を覚えております。

この場をお借りして、立正佼成会開祖の庭野日敬師が、宗教と平和との関わりの大切さを深く理解され、宗教による平和への貢献を進められたことに対し敬意を表します。また、立正佼成会会長の庭野日鑛師、ならびに庭野平和財団理事長の庭野欽司郎師がその遺志を受け継ぎ、長きにわたって貢献を続けてこられたことに対し、さらにはキャサリン・マーシャル博士の卓越したリーダーシップのもと、庭野平和賞委員会の変わらぬ貢献に対し、心より敬意を表します。

また、私が長年にわたって職務を担う荣誉を賜った世界宗教者平和会議と、その関連組織である欧州諸宗教指導者評議会に対しましても、感謝申し上げたいと思います。

そして、一世紀以上にわたり、信教の自由を守る活動の先頭に立ってこられた国際宗教的自由協会に感謝の意を表します。

この良き日に、私はこの喜びを家族と共に、そして世界中のあらゆる場所で、世界宗教者平和会議の活動に携わっている友人や仲間たちと共に分かち合いたいと思います。

庭野平和賞の贈呈式は、良きにつけ悪きにつけ宗教と平和の間に存在する相互作用について、私たちに深く考える機会を与えてくれます。贈呈式のたびに思いを新たにするのは、私たちには抑圧や武力紛争を招いている複雑な社会状況に真剣に向き合う必要があるということです。しかし、何よりもこの贈呈式は、「二度と戦争を起さない」ために、精神的・政治的な責務を明言する場でもあります。

30年前、最初の庭野平和賞がブラジル、レシフェのカトリック大司教、ヘルダー・カマラ師に贈呈されました。以来、庭野平和賞受賞者のリストを拝見しますと、庭野平和賞の「平和」とは、幅広い包括的な理念であることがわかります。つまり、平和とは単に戦争がないという消極的な概念ではなく、人類の安寧に資するすべてのものを含んだ積極的な理念だということです。庭野平和賞の受賞者を輩出した背景には、仏教、ヒンドゥー教、ユダヤ教、イスラーム、キリスト教など、世界のすべての主要宗教があります。人類の安寧はヘブライ語の「シャローム」という言葉で言い表すことができますが、何がそのシャロームを推し進めるかについて、受賞者たちは宗教の中にほぼ同じ答えを見出しています。世界に数多くの平和賞がある中で、庭野平和賞の独自性は、肉体と精神の間、宗教と平和の間、霊性と政治の間に存在する本質的なつながりを深く認識している点にあります。

基本的な自由を守るためには、いかなる国家や文化も、自分たちの状況を精査する道徳的義務を免れることはできません。ノルウェーでは現在、人権に関して国際的な法的機関を上位におくために、200年前に制定された憲法の改正が行われています。また、グローバル化による多文化・他宗教の共存という現実は、これまで単一民族の国であった小国ノルウェーにも衝撃を与えました。そのためノルウェー政府は、21世紀に向けて新しく包括的な宗教政策に関するレポートの作成に着手しました。

今日まで、平和・正義・和解へ向けて、エキュメニカル運動や諸宗教間の活動に取り組み、また政治と関わりを持つ中で、私は寛容こそが平和構築に向けたあらゆる努力の中心であるという認識を深めてきました。

宗教間や宗派間の対立が依然として紛争の原因となり、「聖」なるものがこれまで以上に、愛よりも憎しみと深い関わりを持つようになってきている今日、寛容は益々その重要性を増していると私は確信しています。民族間や部族間の確執や、人種や宗教の違いが引き起こした暴力は、世界各地で深い悲しみを生んでいます。異なった宗教間の紛争よりも、同じ宗教に属する宗派同士の争いの方が、より多くの犠牲者を生み破壊をもたらしていることを、日々、メディアを通して私たちは知らされています。パキスタン、イラク、アフガニスタンなどの地域では、シーア派とスンニー派の間の緊張が最悪の状況にあります。こうした緊張状態は他の多くの国々にも波及し、その拡大を封じ込めようとする試みは、しばしば火に油をそそぐ結果を招いています。

宗教に対する寛容と信教の自由の問題は、世界中で悪化の傾向にあります。このことは、立法や行政のレベルで見られると同時に、宗教を原因とする対立によって引き起こされた、暴力的な事件の増大によっても知ることができます。

ミャンマーでのロヒンギャ族に対する民族浄化の動きに見られるように、多くの国々で、民主化へ向けた行程が少数民族への攻撃と結びついている例が見られます。北アフリカや中東諸国における動乱やシリアの内戦にも、同じ局面が見られます。まさに世界中で、寛容と人間の尊厳を敵にした戦争が行なわれているのです。

過激派との戦いや、聖戦を支持するメンタリティーとの戦いは、どのような名目であれ、矛盾を伴います。世界中のテロを抑え込もうとすると、しばしば人権の基本原則を侵害する事態も起こります。狭義の「国の安全保障」は、さらに大きな危険を生む結果となりました。無人偵察機による顔の見えない軍事攻撃が、これまでより広い地域で行われようとしています。それは兵士の生命を守る代わりに、罪のない一般市民を犠牲にするものです。軍拡競争におけるテクノロジーの進歩は、「正しい戦争」に関する重要な論議に新たな一章を加えるものであります。

そうした状況であればこそ、私たちの世代は、この 21 世紀における寛容の意味を再考する必要があるのです。寛容はどこまで理解され、認められ、実行され得るのでしょうか。平和の文化と人類愛の文明に向けて継続されている今日の闘いは、「寛容と不寛容の衝突」「知と無知との衝突」を意味します。

前世紀に起きた二つの世界大戦は、人類の運命を方向づけるものでした。第二次世界大戦が終結したあと、世界には平和に向けて人類共通の決意が生まれました。その決意は、二度と悲劇を繰り返さないために、共同で組織を設立しようとする遠大な取り組みを生みました。国際連合の誕生は、人類史上最も大きな政治的成果です。未来の世代を戦争から守り、人間の尊厳に対する共通理解に立って自由と寛容を促進する——こうした理想は、戦争に苦しむ人類の希望の表明でありました。

寛容の本質とその真の意味は、その対極にあるものを通して理解することができるでしょう。それは、今日でも数百万の人々の日常生活に影を落としている不寛容・偏見・差別・排斥・剥奪を持つ醜い顔であります。犠牲になるのは「烙印を押された他者」であり、性別・貧困・人種・宗教・肌の色・性的指向・心身の状態・性癖や生活様式などによって差別を受けている人々です。

人間の尊厳・平和・正義・寛容の相互の重要なつながりについて、私たちの世代が過去から受け継がれた教訓をどこまで忘れてしまっているか、そのことを知るのは悲しいことです。

だからこそ、いま私たちは 20 世紀のマグナ・カルタ、すなわち国連憲章と世界人権宣言を生みだした知恵と価値観に立ち戻る必要があるのです。

寛容の大切さや、寛容に付随した概念である「対話」が、多くの人々から無視され、軽蔑の対象にさえなっている今日、私たちに必要なのは、人権に関する法典に記されている見識を再認識することです。法典には、良心の自由、表現の自由、信教の自由、集会の自由など、あらゆる基本的自由の中核に寛容があることが示されています。

国連憲章と、それに随伴する世界人権宣言は、ともに寛容が平和の必須条件であり、社会が調和するための基本となるものであると宣言しており、「西洋の価値観」を押し進めるものではありません。それらは普遍的な価値を持つものであり、宗教と文化の知恵に深く根ざし、あらゆる人間が有する共通の価値であります。

しかし、同時に、人間の無知と世界各地で繰り返される政治的画策によって、国連憲章と世界人権宣言が論争の的となってきたことも歴史的事実です。国連の人権理事会では、人権を伝統的価値観の下に置こうとする試みが繰り返されていますが、それは寛容を最上位に置くことに対して、政治の世界や宗教界に強い不安感があることを示しています。

私たちに必要なのは、1945年に世界を戦争から平和へと導いた人々の勇敢な証言から学ぶことです。混乱し苦悩する人類のニーズに取り組み、二度と苦しみや抑圧を許すことがないように、政治指導者たちは結束したのです。

国連憲章のメッセージは、簡潔な文言で、深遠な知恵を表しています。

「われら連合国の人民は、[中略] 戦争の惨害から将来の世代を救い、基本的人権と人間の尊厳及び価値 [中略] に関する信念をあらためて確認し、[中略] このために、寛容を実行し、且つ、善良な隣人として互いに平和に生活 [中略] することを決意した。」

世界人権宣言は、「すべての国又は人種若しくは宗教的集団の相互間の理解、寛容及び友好関係」を築くため、教育の重要性を高らかに宣言しています。

平和を求めて努力を重ねてきた人間の歴史から生まれたこの荘重な声明は、「差別の撤廃」「寛容」「尊敬」を提唱する、人権に根差したさまざまな国際条約の基盤となるものです。

その一つの柱が、1995年11月16日に公布・調印されたユネスコの「寛容の原則に関する宣言」です。

この宣言文は、私たちに次のことを要請しています。「われらの社会において、寛容を押し進めるのに必要な、あらゆる積極的な対策を講じなければならない。なぜならば、寛容とは、理念にとどまるものではなく、平和のために、またすべての人民の経済的かつ社会的な向上に必要とされるものだからである。」

寛容など政治的妥当性を欠いた無力な観念にすぎない——そのように多くの人が考えている私たちの時代に向け、この宣言は、寛容を「平和」と「向上」に結びつけ、語りかけます。宣言には、寛容と尊敬は、同じコインの表裏をなすものと書かれています。多様な文化を持つ世界の豊かさと人間存在の多様性が、宣言によって肯定されていることに心は躍動し、道徳的義務と政治的責務をその文言に感じて身の引き締まる思いがします。寛容とは何か、そして寛容でないものとは何か——今日必要とされているのは、その簡潔な説明なのです。

では、こうした荘厳な宣言の条文に書かれた「寛容」とは何でしょうか。

「寛容とは、われらの世界のさまざまな文化、表現形態、人間のあり方の多様性を尊敬し、受容し、理解することである。[中略] 寛容とは、違いの中の調和である。それは、道徳的義務だけではなく、政治的・法的な要件でもある。平和を可能にする徳目である寛容は、平和の文化が戦争の文化に取って代わることに貢献する。」

「寛容とは、何よりも、普遍的権利と他者の基本的自由に対する認識から引き出される積極的態度である。[中略] 寛容とは、人権、多元主義（文化的多元主義を含めた）、民主主義、法の支配を支持する責務である。」

寛容を、信念の欠如、無関心、そして価値観の欠如と同一視する人々にとっては、「寛容でないもの」についての次の見識に目を向けることが大切です。

「寛容とは譲歩ではない。へりくだりや甘やかしでもない。寛容の実践は、社会の不正義の許容、自己の信念の放棄、もしくは自己の信念を弱めることを意味するものではない。」

では、「寛容の原則に関する宣言」の中のこうした主張を、宗教者はどう受け止めとめるべきでしょうか。

私たち宗教者は、人権擁護と人間の尊厳の確保に向けて、宗教が世俗の法律や規則に影響を与えていると主張していますが、実際はどうか自問しなければなりません。多くの場合、現実はその逆であり、宗教者の方が世俗社会から学ぶ必要があること、ま

た寛容について十分に理解し実践するために、人道主義的世界観に耳を傾けなければならないことを、宗教者は素直に認める必要があるのではないのでしょうか。人権について宗教者は学ばなくてよいのでしょうか。また宗教者が偏見を捨てるためには、世俗主義からの問題提起が必要なのではないのでしょうか。

こうした問いは、理論上の問題ではありません。それは人間の生死にかかわる問題であり、しばしば女性に対する許しがたい暴力としてその姿を現します。多くの女性が寛容の殉教者となり、残虐行為が神を讃える行いであると主張する者の手による、非寛容の犠牲者です。神に対するこれ以上の冒瀆はありません。

少女への教育を求めて闘ってきた勇敢なパキスタンの少女、マララ・ユスフザイさんは、過激派の手によってあやうく生命を奪われそうになりました。これまで数多くの勇敢な男女が、思想の自由、信教の自由、集会の自由のために闘い、そのために暗殺されました。テロリストの「聖戦」の相手は寛容です。そして犠牲となるのは、繰り返し無視され迫害されてきた人々、すなわち、子供たち、女性たち、貧しい人々、そして教育を受けていない一般の人々なのです。

今日の宗教教育のもっとも大きな課題は、子供たちの意識や良心のもっとも奥深いレベルで、彼らのものの考え方を変えていくことです。まさしく、聖コーランには「宗教に強制はない」と書かれています。宗教を、より良い未来への夢を打ち砕くために利用してはならないのです。

地球的な価値観であり世界平和の前提となる寛容の精神に触発され、光栄にも私が長年務めてまいりました欧州諸宗教指導者評議会は、宗教と社会との相互作用の側面について、これまで数多くの声明を通して発言を続けてきました。そして、寛容を身に着ける訓練として、対話と共通の実践を推進する必要性を見る中で、対話と寛容の間には互恵関係があることを知りました。すなわち、寛容は対話をもたらし、一方、対話は信教の自由や表現の自由を含めた、基本的な自由の推進と擁護に欠かせないものだということです。民主主義は対話によって発展するのです。

例えば、開かれた社会における宗教の役割と位置づけなど、ノルウェーを含めほとんどのヨーロッパ諸国で日々論議されている問題について、欧州諸宗教指導者評議会の「イスタンブール宣言」は言及しています。すべての主要宗教の代表として、私たちは、次のことを約束しました。

「私たちは、あらゆる宗教の権利が公共の場で認知されることを目指して活動する。寛容な社会においては、人々は自らの信仰を推し進め、公共の場でそれを明らかにす

る権利を有する。この権利には宗教のシンボルを表示する権利、宗教的な衣服・シンボル・小物を身につける権利、新しい世代の教育のために学校を作る権利、それぞれの宗教伝統に合った礼拝場を作る権利などが含まれる。」

文化の多様性や少数派の基本的権利を擁護する個人を標的に、メディアを通じた中傷発言が横行し、その抑制が極めて困難な大陸においては、寛容を支持するこうした文言には強く心に訴える力があります。反ユダヤ主義はさまざまな新しい形で表れており、またイスラームへの嫌悪も増加しています。キリスト教の教義と信仰は、他者を攻撃する手段として利用されています。同時にキリスト教は、その勢力を益々増大させている無神論の圧力にさらされているのです。

「衝突」によって、今日の新たな歴史が作られ、未来世代の人々の生活にその影響が伝わっていきます。そうした衝突の多くは、寛容に向けた闘いであると言えるかもしれません。いわゆる「アラブの春」は、寛容と民主主義への欲求から始まったものだと私は考えます。原動力となったのは、数世代にわたって自由を抑圧し、繁栄と平等の障害となってきた独裁主義的な支配に対する不満でした。自由を欲する熱情に火をつけた人々が望んだものは、今日見られるような、宗教を装った新たなタイプの独裁主義ではありません。彼らは過去の独裁者に代わる新たなファラオ（暴君）を望んで戦ったわけではないのです。

不寛容の暗闇は、知識と信仰の光によって打破できるのか——そのことが、今日、多くの人々の問いとなっています。多元的で民主的な社会、そして真に寛容で開かれた社会を目指して努力をし、祈ることで、より良い世界は今世紀中に実現するでしょうか。現在の「春」は、対話と普遍的人権が尊重される「夏」をもたらすでしょうか。

最後に申し上げます。寛容は勝利至上主義のもとで花開くことはありません。そして、独断的態度では対話は成功しません。寛容は、人間の魂の中で生まれた、共感する心です。それゆえ、寛容は権力の言語ではなく、謙遜の言語なのです。イエス・キリストによる、救いを約束する次の言葉に、そのことが示されています。

「柔和な人たちは、さいわいである。彼らは地を受けつぐであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである。彼らはあわれみを受けるであろう。」それこそが、庭野平和賞に受け継がれた精神であると私は信じます。

その精神を胸に、私は祈りを捧げます。「新しい、寛容の時代の夜明けを迎えよう」と。